**薬師如来像（銅造薬師如来坐像）**

**重要文化財**

薬師如来は、文字どおり医を司る仏陀であり、現世の東方遠く離れたところにある東方浄瑠璃世界に住んでいる。薬師は病気の治癒や長寿と関わりがある。薬師如来はさまよえる魂を正しい精神的な道へと導き、宗教的な実践の間、守ってくれる。

薬師如来は東金堂の本尊であり、蓮華座のかたちで座り、衣の裾は高い長方形の台座の端から流れるように垂れ下がっている。左手は膝に置かれ、薬瓶を持っている。右手は肘のところで曲げられ、手のひらは外側を向き、指は伸びている。

15世紀の初頭につくられたこの像は、銅の合金製で、粘土の原型からの鋳造（土形原型による鋳造）の技術で作られている。この前にあった像が1411年の火災で焼失したため、そのかわりとしてつくられた。1937年の堂の補修の際、この像の台座の中から前の像の頭部が発見された。この頭部は685年に鋳造された銅合金製の像の一部であり、奈良市の約 20km南にある飛鳥の山田寺から興福寺に移されたものである。再発見された仏頭は、仏像の断片としては数少ない国宝に指定され、現在は興福寺の国宝館に展示されている。